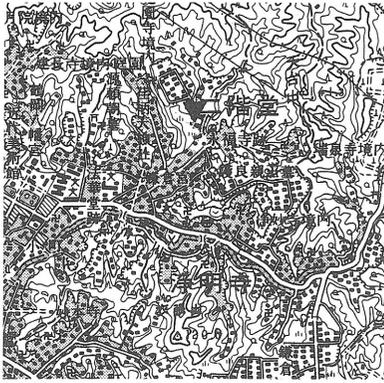


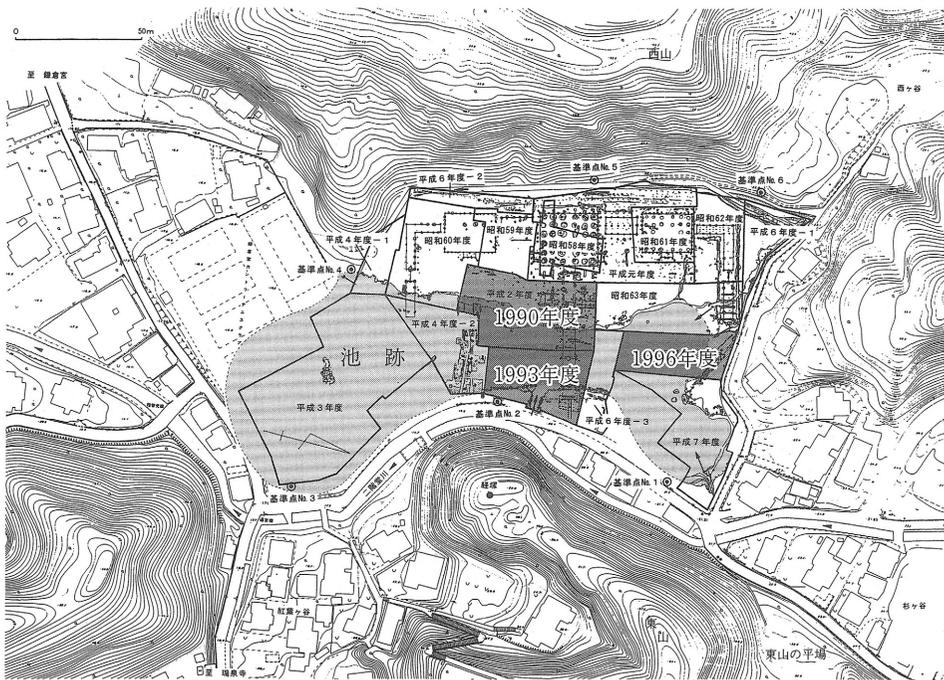
神奈川・永福寺跡 ようふくじ

- 1 所在地 神奈川県鎌倉市二階堂
- 2 調査期間 一 一九九〇年(平2) 八月～二月、二 一九九三年七月～二月、三 一九九六年七月～一九九七年一月
- 3 発掘機関 鎌倉市教育委員会
- 4 調査担当者 福田 誠
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 一二世紀末～一四世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(横須賀)

本遺跡地はJR鎌倉駅の北東約2kmのところの位置する。「二階堂」や「三堂」などの地名も残り、古くから永福寺跡と考えられていた。永福寺は『吾妻鏡』文治五年(一一八九)二月九日条を初見とし、同年九月源頼朝による奥州



永福寺跡調査位置図

藤原氏追討時の戦死者供養がその建立目的とされる。また建立する際そのモデルとなったのが、頼朝が平泉で実見した大長寿院の二階堂であったとされる。

これまでの発掘調査によって、永福寺の具体的な伽藍配置が明らかになってきた。二階堂を中心に両脇堂と呼ばれた南側の阿弥陀堂と北側の薬師堂が東向きに並び建つ。特徴的なのがこの三堂の基壇として木製の基壇外装が用いられたことであり、寛元・宝治年間（一一四三―四九）に行なわれた大規模な修理により、石積みの壇正積基壇に造り替えられる。両脇堂からは庭園に向かい翼廊が延び、中門を経て釣殿が設けられる。三堂の前面に穿たれた池には、尾根の先端部を削って造り出した岬状の部分に、北奥の西ヶ谷より北翼廊脇を抜ける遣水を引き込んでいた。

遺構の変遷について簡単に触れておくと、一二世紀末の創建後、Ⅱ期になると建物の解体修理など大規模な修理が行なわれ、前述したように基壇外装が木製から石積みへと変更される。弘安三年（一一八〇）には火災が起こり、再建される（Ⅲ期）。その際、規模・形状などは保たれるが、瓦の出土量が減り小型化することから、屋根が総瓦葺から檜皮葺へと変更されたと考えられる。延慶三年（一一三〇）に再び火災があり、再建される（Ⅳ期、一四世紀以降）が、複廊・翼廊の再建はなく三堂と釣殿・橋のみの再建と考えられる。

木簡は、一(1)が二階堂前面から阿弥陀堂前面にかけての庭・池か

ら出土した。二(1)～(3)は二階堂正面の池中のⅡ期遺構面（一三世紀中頃）から出土した。三(1)は薬師堂前面の池中のⅣ期下層覆土中（一四世紀後半）から出土した。

8 木簡の釈文・内容

一 一九九〇年度調査

(1)  南无阿弥陀仏 (230)×30×4 061

頂部の二カ所に圭頭状の切り込みを入れた板塔婆である。墨書はわずかに残り、下半部は欠損している。

二 一九九三年度調査

(1)  (169)×21×2 019

(2)  ^{【鬼カ】}「符籙」□□ 236×36×3 011

(3)  ^{【ハシ】}南無大日如来 384×24×2 061

(1)は頭部を左右から切り込んで圭頭状にしている。左下半の多くを欠損する。(2)は文字というよりも人面を表現したように見受けられ、呪符と考えられる。左上にわずかに残っているのは目と考えられ、また右中央下に「鬼」と書かれているようにみえる。中心部分に釘孔が貫通し、左下半部が欠損している。(3)は完形の笹塔婆。

